

悲願の学生日本一へ

ラクロス部、 一丸となって突き

学生日本一へ、今年こそ。1989年の創部以来初の悲願に向け、ラクロス部が熱く燃えている。2019年の関東学生リーグ戦、2020年の関東学生特別大会と、2年連続でファイナル4（準決勝）で早稲田大に1点差で惜敗し、学生日本一を前に涙をのんだ。

ラクロス界は関東勢の大学の層が厚く、まず関東を制することが日本一への近道となる。「悔しさを晴らし、常勝チームの礎を築きたい」。学生日本一への思いや、ラクロス部の活動を通して得られたことなどを、選手とスタッフに寄稿してもらった。





進め!

「個の力」「チーム力」を 兼ね備えた集団に



主将 藤井亮 (商4)

2020年11月21日。くしくも1年前と同じ対戦相手の早稲田大、会場も同じ。あと1点を取れば同点となり延長戦。そんな状況で試合は終了し、中央大学ラクロス部「BANDITS」の2020年の挑戦は終了しました。

2年連続の関東4強も 目標に届かず

BANDITSは2017～2020年の4年間で、関東準決勝に3度出場している強豪です。2020年度は創部以来初となる2年連続のベスト4を達成しています。関東を制したチームが全国を制している大学ラクロス

界の中で、関東制覇まであと一歩という段階に近年のBANDITSは位置しています。

2020年度の活動では私たちもコロナ禍の影響を大きく受けました。その中で毎日の検温、マスクやフェイスシールドの着用など、さまざまなルールを作り、徹底したことで、1人の感染者も出さずに大会に挑めました。また、どんな状況でも常に全員が最善の努力をし、大会に向けた準備をしたため、「今年こそ日本一になれる」と思っていました。しかし結果は惜敗。ベスト4ではなく日本一を目標にしていただけに、非常に悔しい結果でした。

悔しさから学び、浮かび上がった

課題は劣勢を打破する個人の力です。この差がベスト4敗退という結果につながったと感じています。一方で、試合を組み立てる力や、負けているときの雰囲気作りといったチーム力はBANDITSの強みだということも大会を通して実感しました。「個の力」と「チーム力」の両方を備えたチームになることが2021年度の目標です。

1人ひとりが やるべきことを追求

今年こそ日本一になるため、チームとして特に取り組みたいのは「自立した強力な個の集団」を作り上げ

ることです。ラクロスは競技の特性上、全員が強くないと絶対に勝てないスポーツです。そのためには、一人一人が自分にできること、やるべきことを追求することが大切だと考えています。BANDITSならではの練習の運営も、チーム分けも、学生主

体で取り組める環境を生かして、「自立した強力な個の集団」を作り上げ、目標を達成したいと考えています。

最後に新入生の皆さんに伝えたいです。「日本一という経験をした」「人として自立したい」「ただス

ポーツが好き」など、動機は人それぞれだと思いますが、私たちと一緒に本気で目標に向かって努力しませんか？ 入学時に「全員が初心者」ということは、ほかにはないラクロスの魅力です。一緒に学生生活を熱く、充実したものにしましょう。



仲間に寄り添い、自分と向き合う ラクロス部だからこその経験



副将 佐藤 怜 (商4)

私は、ラクロス部での活動を通して、仲間と、そして自分自身と真正面から向き合う経験をしています。高校まで野球に打ち込んだ私は、大学でラクロスに出会いました。

リーグ戦での活躍を目標に入部

しましたが、入部後はけがでプレーできない日々が続きました。正直、この期間は苦しかったです。しかし、誰かの短所を誰かが補えることがラクロスの一番の魅力だと感じ、少しでもチームに貢献したいと思うようになりました。

**バックグラウンドの異なる仲間
 相互理解に努める**

プレー以外で貢献するにはどうしたらいいか。客観的なアドバイスを仲間に伝えようと考えました。日

本ではまだメジャーなスポーツとはいえないラクロスですが、毎日のように海外の試合の動画などを見て知識を肉付けし、アドバイスに生かしました。

しかし、アドバイスが上手に伝わっている実感がわきませんでした。選手個々がさまざまなスポーツやスポーツ以外のことの経験者であり、いわばバックグラウンドが異なります。異なる価値観を理解、尊重して、各自へのアプローチ方法を変える必要があると考えました。副将として、面談や日誌を通して仲間と向き合い、相互に理解を深めるように努めています。

自分の限界を 決めつけない 地道な努力の大切さ

プレー面では、昨年2月にフィールドに復帰しました。リーグ戦出場を目標に、「自分の弱みの言語化」「練習量」にこだわり、自分自身と向き合いました。言語化に関しては、自分の弱みが他人に伝わるレベルにまで分析すること、練習量に関しては毎日10分でも自主練習することを徹底しました。

その結果、昨年リーグ戦出場を果たしましたが、プレーの内容は全く満足できるものではなく、さらに

努力を継続することが必要だと感じていました。ただ、取り組みを通して、自分の限界を決めつけないこと、地道に努力し続けることの大切さに気がきました。

仲間に寄り添い、自分自身とも向き合う経験は、ラクロス部だからこそ可能だったと強く感じています。今年こそは学生日本一をつかみ取り、ラクロス部で得た経験をもとに、社会に出てからも活躍したいと思っています。

追い求めるもの 「選手の笑顔こそスタッフの喜び」

主務、マネジャーリーダー兼スタッフリーダー **徳永汐里 (法4)**



私は常に「選手の力になるために」をモットーに部活動に取り組んでいます。選手は日頃の練習はもちろん、練習外での自主練習やミーティング、ジムトレーニングなど、強くなるために常に努力を惜しみません。きっと疲れているはずなのに、一切そんな素振りは見せずに、常に本気で部活動に取り組んでいます。そんな選手をずっとそばで見ているスタッフとして、選手の力になりたいという気持ちは日に日に募るばかりです。

地味で泥くさい仕事

私たちは、選手にとって快適な練習環境を作るために試行錯誤しながらグラウンド内外の業務に励んでいます。仕事は正直目立つものではないです。地味で泥くさい作業もたくさんあります。けれども、一度も嫌だと感じたことはありません。

それが選手のためになるのなら、選手にとって少しでも力になれるのなら、全く苦ではありません。試合に勝ったとき、選手は本当にうれしそ

うな顔をします。その笑顔を見たとき、「この笑顔に少しでも自分が貢献できたのだろう」と考えると、涙があふれそうなくらいうれしいです。

現在、ラクロス部では学生日本一という目標を達成するために、練習体制やメニューにさまざまな変革を行っています。この変革にスタッフとして、どうアプローチしていくか、選手が求めるスタッフ像をどう体現していくかが求められていると感じます。

選手以上に チームのことを考える

そのために、選手の小さな表情の変化や、些細な一言を敏感に感じとり、選手が何を考えているのかを判断して行動する必要があると考えています。「スタッフがいてくれてよかった」と思ってもらえるように、一つ一つの練習で選手以上にチームのことを考えて取り組んでいきます。

学生日本一を達成したとき、みんなは一体、どんな笑顔を見せてくれるのでしょうか。心から笑う選手の顔を見るために、きょうも私は部活に向かいます。

☆ラクロス

先端に網のついたスティック(クロス)を用い、硬質のゴム製ボール(直径6センチ、重さ150グラム)を奪い合って相手ゴールを目指す。北米発祥とされ、米国とカナダにプロ・リーグのチームがある。

フィールドは約100×55メートル。1試合は各15分の4クォーター制。アメリカンフットボールのような激しい肉弾戦、サッカーのようなスピーディーかつダイナミックな選手の動き、シュートの速さなどが魅力。ヘルメット、マウスピース、エルボー(ひじ)、ショルダー(肩)の防具を装着する。

試合展開の目まぐるしさは「10秒に満たない時間で1点が入る」というほどだ。少々のリードでも油断はできず、展開次第では大逆転も可能だという。女子ラクロスは体のぶつかり合いが禁止など、ルールが男子とは異なる。



中央大学ラクロス部



1989年、有志10人で創部。関東学生リーグ1部リーグ所属。部員数(2021年度在籍の2~4年生)は選手49人、スタッフ17人。これまでに22歳以下の日本代表や、日本代表選手も多数輩出している。2021年度スローガンは「求」。愛称BANDITS。



女性に対する 暴力撤廃の国際デー

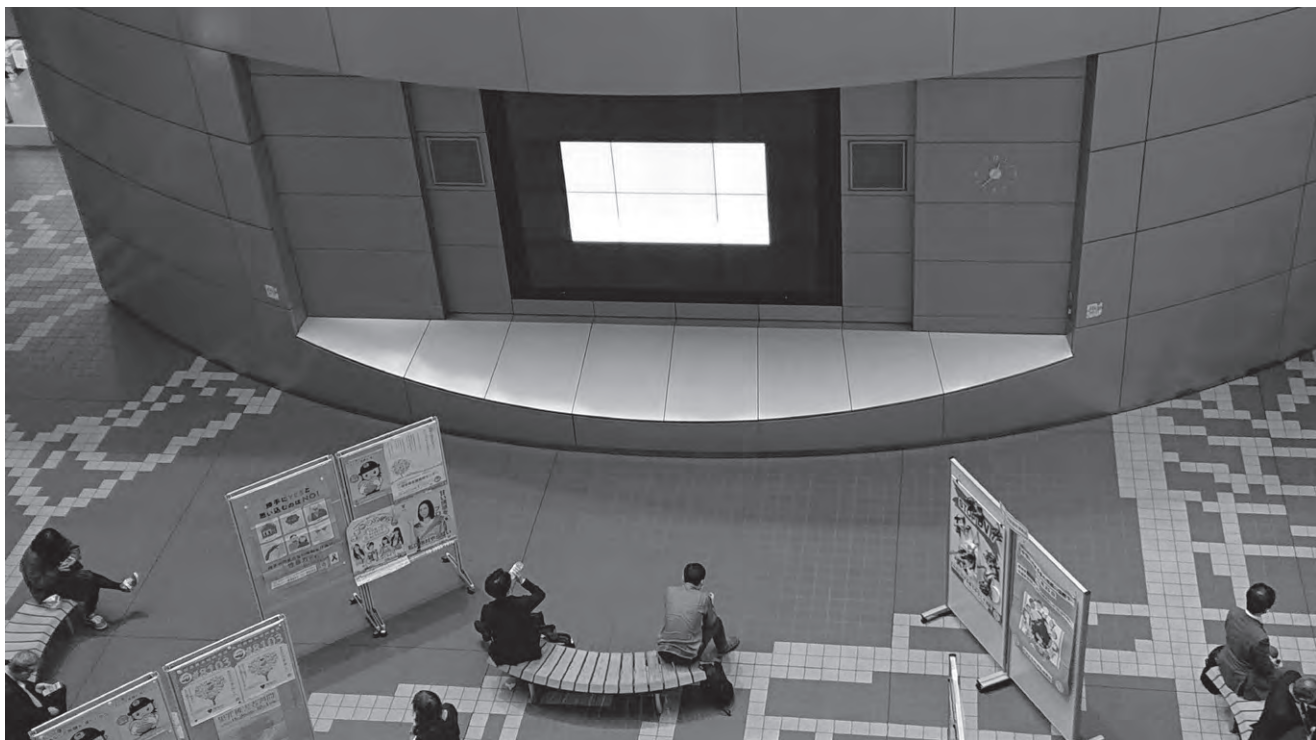
「文京オレンジデー」キャンペーンに参加

理工学部のWISE Chuo学生部に所属する学生たちが今年も、
後樂園キャンパスのある東京都文京区の「文京オレンジデー」キャンペーンに参加しました。

キャンペーンは、女性や女兒への暴力撤廃を呼びかける活動です。

学生2人が活動を通して心に残ったことや、キャンペーンの意義などを報告します。

WISE Chuo 学生部 内山志織(理工4)、浅井友花(理工4)



文京シビックセンター地下2階では、キャンペーンのパネル展示も行われた▲

オレンジデー

ジェンダー平等と女性のエンパワーメント(能力開花)を進める「国連女性機関」(UN Women)は、毎年11月25日(女性に対する暴力撤廃の国際デー)から12月10日(人権デー)まで、女性や女兒への暴力のない明るい未来をイメージしたシンボルカラーのオレンジ色に染める活動を世界各地で提唱している。期間中、国連事務局ビルがオレンジ色にライトアップされ、世界各国やソーシャルメディアでも女性に対する暴力撤廃を呼びかけている。

中央大学はこの活動に賛同し、とくに後楽園キャンパスのある東京都文京区の「文京オレンジデー」キャンペーンにおいて継続的な取り組みを実施している。2020年度は女子学生によるメッセージ映像の提供、キャンパス構内での啓発グッズ配布、ポスター掲示やイルミネーションなどを行った。

ダイバーシティセンターが発足した2020年度は、ダイバーシティ・ウィークに合わせて多摩キャンパスでも取り組みを始め、各所をオレンジ色に染めた。



暴力、差別の実情に危機感

WISE Chuo 学生部 浅井友花(理工4)



キャンペーンのメッセージ動画より▶

文京区役所から一番近い大学のWISE Chuo 学生部として参加しました。理由はビジネスデータサイエンス学科(旧・経営システム工学科)の加藤俊一教授から、文京オレンジデーに関する話をうかがったからです。コロナ禍の状況にあり、女性暴力についての現状を調べ、女性暴力がなくなるための取り組みについて感じたこと、考えたことをスマートフォンやパソコンのカメラを使って録画した動画が、文京シビックセンターのマルチビジョンと、文京区のYouTubeで放映されました。

キャンペーンに参加する前は、オレンジデー自体を知らず、一からこの問題について深く考える契機になりました。見えないところで性別・身体などの表面的な違いといった理不

尽な理由で、暴力を受けたり差別が起きたりしている実情を知り、他人事ではないという強い危機感を感じました。

参加後は、ジェンダー平等についてのネット記事を読むようになったり、女性暴力撤廃に関するオンライン署名に参加したりして、自分の意見を持てるようになりました。

女性への暴力を防ぐ義務教育を

今もなお、女性が差別され暴力を受けてしまうのはなぜか。その背景には世間での認知度がまだ低いということや、どこか他人事のように思えてしまっていることなどがあると思います。

世間での認知度が低いことに関しては、義務教育の指導が足りていないからということがあると思います。学力を上げるだけが学校の目的ではないと思います。もっと女性暴力や差別に関する授業が必要だと感じます。

暴力を受けている女性は怖くて声を上げられないと思います。そんな女性も相談しやすい環境を国や地域、教育機関が作り、実情を知り、解決しなければ、被害を受ける女性は増える一方でしょう。女性からのSOSにもっと敏感になり、被害を減らしていける世の中になってほしいと切望しています。

キャンペーンは、1人の女子大学生として女性暴力への恐怖を感じ、この問題が根本からなくなるにはほど

うしたらいいかを考え、行動できる機会になりました。男女を問わず、皆

がこの問題を知るだけでなく、理解するまでに至らなければ解決でき

ないと強く感じています。

ジェンダー平等への意識、理解を深める

WISE Chuo 学生部 内山志織 (理工4)

キャンペーンのメッセージ動画より▶



後楽園キャンパスのある東京都文京区は「女性に対する暴力撤廃の国際デー」の11月25日、文京シビックセンターで毎年、「文京オレンジデー」キャンペーンを行っています。

理工学部ビジネスデータサイエンス学科(旧・経営システム工学科)の加藤俊一教授から、私の所属する「WISE Chuo 学生部」にキャンペーンに関する説明があり、興味を持ったため参加しました。活動内容は「女性への暴力撤廃についてのメッセージ」を自分なりに考えて動画で撮影し、文京区に提出したことです。その動画は、文京シビックセンターのマルチビジョンと文京区のYouTubeで放映されました。

今までは女性への暴力の現状、オレンジデーキャンペーンの取り組みについて詳しく知りませんでした。今回の参加がきっかけで、ジェンダー平

等に対する意識や理解を深めることができ、この問題について深く考えるようになりました。

女性への暴力には性犯罪、ストーカー行為、人身取引、セクシュアルハラスメントなど、さまざまなものがあり、家庭、地域、社会などあらゆる場面で起こる可能性があります。全世界では3人に1人も女性が生涯に1度は暴力を受けるといわれています。こんなにも多くの人が苦しんでいるのに、女性への暴力・差別に対して関心のない人が多いと感じました。

まず関心と理解を容易に助けを求められる社会へ

そのために相談しづらく、助けを求められない世の中になっているのではないかと思います。問題解決のた

めには、1人でも多くの人に女性への暴力、ジェンダー平等について関心を持ってもらうことが大切だと思います。少しでも理解・関心があり、当事者意識を持っていれば、見て見ぬふりが減り、被害を受けている女性に手を差し伸べることができるようになると思います。

日本ではジェンダー平等がかなり遅れているといわれているため、SDGsの「ジェンダー平等の実現」は今後さらに力を入れて取り組んでいかなければならない課題であると実感しました。

今回参加したことで、女性への暴力についての現状を知り、自分自身の意識を変えることができました。ジェンダー平等の実現には長い歳月がかかるとは思いますが、少しずつでも状況が改善していき、全ての人々が暮らしやすい世の中になることを強く願います。

WISE (Women In Science and Engineering)

WISEは、中央大学の理系に在籍する女性の支援を目的とした「女性理工系スペシャリスト育成プラン」のキャンペーンワード。産業・科学技術の基礎から応用力まで養成する実学教育と、高度な専門家としてのキャリア教育プログラムを実施している。